

編集室から

新年、あけましておめでとうございます。

みなさまは、善き年の瀬・年越し・年始をお迎えのこととお慶びを申し上げます。

他国では逆に第〇派がやってきて、また経済規制が復活していますが、わが国だけが、新型コロナウイルス感染症が急激に収まってきました。この理由・原因は未だ、誰にも分からず、世界から不思議がられているようです。この理由については、諸説語られていますが、確定的なことはかつ瞞されていないので、もっともらしい説に流されないよう、気を付けたいものです。

中でも、「ウィルスも寄生主（今回の場合は、ヒト）が死に絶えるとウィルスも増殖できないので、必ず弱毒化する」という説は、私も信じてしまっていました。弊紙に寄稿してくれている井垣君との対話で、新たな変異の温床となる可能性を指摘され、納得いたしました。

医師である井垣君が、稿を寄せてくれていることは、ほんとうに有り難いと思っています。

さて、今月の表紙は、我が家のお節です。娘は栗きんとん、私は田作りと数の子など、毎年各自の好物を担当してきました。

娘が嫁いでからは、年末にご近所の仲良しさんたちと、わいわい賑やかにたくさん作って、お重に詰めて持ち帰るという形に落ち着いています。お節料理にも、家庭の独自性があるので、他家より新しくやってきた逸品も少なくありません。

中でも、我が家のこだわりは、金沢の近江町市場で仕入れた旬の加賀野菜を使うことです。もちもちとした独特の食感の加賀レンコン。食べると出世すると言われていたクワイ。そして、大きなゆり根。ただし、黒豆だけは、どうしても丹波産に限ります。（は）



のと
だらぼち

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川畠さんが「能登だらぼち」を引き受けて改装開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

のと だらぼち
03-5537-3078
17:00~23:00 日曜祝休

中央区銀座8-4-27
プラーザ銀座ビル地下1階
(銀座外堀通りasics前)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2022/01
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp

2022/01
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

謹賀新年

睦 月



我が家の手づくりお節
by hama

寄稿『新型コロナウイルス感染症 第十八報』

サンポート高松クリニック 井垣 俊郎

二〇二一年を振り返って

二〇二一年も、コロナに翻弄されたまま終わろうとしています。まずオリンピックありきで感染拡大を招き、デマと憶測が飛び交ったワクチン接種を経て、奇跡的な第五波の縮小に喜んだのも束の間、規制緩和が原因で欧米では感染が再拡大して、そしてトドメがオミクロン株でした。もうこれ以上振り回されないよう、新しい年に向けていま大切と思われる事を考えてみます。

〓 感染の現状をどう考えるか

連日マスコミで報じられているように、オミクロン株は欧米を中心として急速に感染が拡大しています。目に見えない隙間からしみ込む水のように、日本の水際対策をすり抜けてしまうのも時間の問題でしょう。

病原性に関しては、猛威を振るったデルタ株に比べ弱いという結論で大丈夫そうです。しかし感染力が強いことは間違いないので、感染者数が増えると割合は低いとはいえ重症者の数も増えかねません。またワクチン接種者にも感染する「ブレイクスルー感染」も、気になる特徴の一つです。現時点でワクチンの重症化予防効果は保たれていないのが、せめてもの安心材料ではありません。

〓 第二・第三のオミクロン株

オミクロン株を際立たせている特徴が、遺伝子変異の多さです。これまでの変異株とは全くかけ離れた多さです。これだけの変異が出現した原因について、当初から最大の謎として議論されてきました。

濱の起業塾 三十三『事業運①』

人はある時、命を授かりこの世に生を受ける。須らく生き物は皆同じである。人が創る事業もまた、同じだと感じている。

それはあたかも、命を吹き込まれたかの如く産まれ、時を刻んでいく。

永く「こと興し」の現場に携わり、未だに解明できていないことがある。

それは、起業の成否に、スキルだけではない「何か」が影響しているのではないかという想いである。

どうやら、売り上げの高さ、影響の幅広さ、時代の長さは、起業の際に抱く志の高さ・広さ・深さと連動しているのではないかと考えてきた。

ところが、どこから眺めても素晴らしい起業企画が、まったく機能しないことがある。これは一体、何故なのだろうか。事業に関わる人の努力は欠かさない。がしかし、それにも関わらず、それを超えて如何ともしがたいものがある。

最も有力なのは、極度に免疫状態が良くない人の体内で増殖したため多数の変異が蓄積されたという説です。特に無治療のHIVウイルス感染症(AIDS)患者が疑われています。差別や偏見を生んではいけないので強調しておきますが、HIVウイルス感染症は今では薬さえ飲めばコントロールできる病気になっています。少なくとも日本では、免疫不全状態に陥ることはまずありません。しかし、世界では違います。図を見てください。世界のHIVウイルス感染者の半数以上が、東部・南部アフリカに集中しています。彼らのほとんどは、貧しくて薬を買うことができません。当然、コロナのワクチンも接種していません。そんな彼らの中からオミクロン株が生まれたとしたら、彼らに対して見て見ぬふりをして自国の事だけを考えてきた先進国への強烈なしっぺ返しかもしれません。

そして更に恐ろしいのは、そのような環境からは第二・第三のオミクロン株がいつ生まれても不思議ではないということですね……。

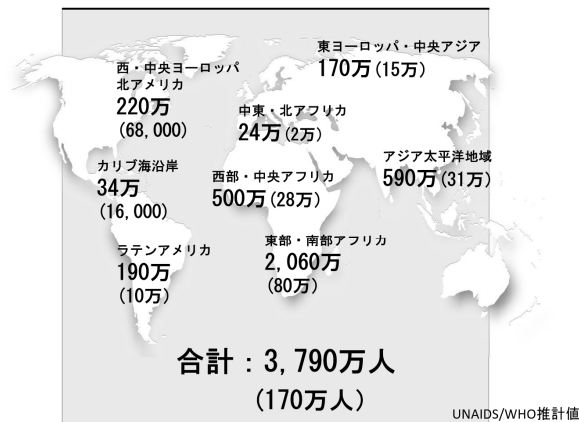


図1 世界のHIV陽性者(新規感染者) 推計総数(2018年)



【プロフィール】
（いがき としお）金沢大学北潟寮で、濱さんの二年後輩でした。濱さんは、とつても怖かった…。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松で又クヌクしています。

漁師だった岳父は、船頭が生まれ持つ運氣の流れが漁獲に現れると、よく言っていた。上場企業で猛烈な出世を遂げた父は、「運を呼び込むのも実力のうち」と、寺社に通っていた。

上に立つ人の違いによって、事業が不振に陥ったり、逆に事業に順風が吹くことがあるのはなぜなのか。個人の努力を超えた不可思議な世界が、そこにはあるように気がしてならなかった。

人はまた、望む望まぬに関わらず、運不運を持つようだが、それが何故そうなるのか。運というものは、個人の努力やスキルとは連動しない何か得体のしれないもののように感じてしまう。何故、事業の運に恵まれ無い人が現れるのか、どうしてそうなるのか、神仏のみぞ知るのであろうかと考えた時もあった。が、そこで思考を停止してしまうと、起業支援になりはしない。

未だ仮説の域をでないが最近、それは「慎み」と関係があるように思えている。

前号の前振りに続き、データを考察していきたい。

労働力人口は最初の緊急事態宣言（2020年4～5月）とともに大きく減少し、その後も前年を下回りながら推移していたが、同年11月にはやや持ち直した。先に述べたように、従業者が休業者や完全失業者になるだけでは、この労働力人口は減らない。

2020年4月の、前月比59万人の大幅減は、仕事を失っただけではなく仕事を探すことすらあきらめたという厳しい状況を表していると捉えられる。この労働力人口59万人減は、就業者数72万人減と完全失業者数13万人増に分解される。

就業者数は2020年11月に回復の兆しをみせたものの、12月はそれが腰折れしている。完全失業者数は同年8～10月において200万人を超えるなど、前年同月を約50万人上回る水準で推移し、改善の兆しはみられないまま年末を迎えた。その結果、完全失業率（季節調整値）はじわりじわりと上昇し、8月以降は3%台に乗せて推移している。

コロナ禍により職を失い、一旦諦めて非労働力化していたものが、再び求職活動を始めた結果、完全失業率の上昇につながっていた可能性もある。ただし、リーマンショック後の完全失業率は5%台であり、この3%台突入という水準自体は危機的状況とは言えない。

就業者数を男女別にみると、明確に違いがあらわれている。

男は、緊急事態宣言直後は緩やかな減少にとどまったが、その後7,8月にやや持ち直した後、再び低下し年末にかけて最も厳しい状況となっている。一方で女は、緊急事態宣言直後に前月比50万人という激減をみせたあと増減を繰り返したが、11月には大幅な回復傾向をみせた。

これらの傾向の相違は、次号に述べる正規／非正規雇用の対照的な姿とも関連していると思われる。

自営業者・家族従事者の就業者数においては、コロナ禍による影響は明確にはあらわれていない。（次回に続く）

（先月号から、つづき）

2.生活者

コロナで一番変化したのが僕は生活者の価値観やライフスタイルではないでしょうか。

よく耳にした言葉が

- ・週のほとんどを自宅で仕事してます
- ・夕飯は僕がつくっています
- ・お取り寄せやいいお酒を買ったので自宅飲みが楽しい
- ・職住近接の呪縛から解かれ、郊外の大きめ戸建に引っ越します
- ・会社に行っても分散出社だから仕事が終わればまっすぐ家に帰ります
- ・面倒だと思っていた人間関係がコロナ禍で整理できてよかった
- ・飲み会が減ったことで月にこんなにお金使っていたのという事を知ったなどなど。

これすべて飲食業にとってマイナス要因です。

先日の朝のニュースでもリクルートが調査した63%の人が『ノミケーションは無駄』という数字を見て、驚きは全くなく妙に納得しました。

飲食業を経営している僕自身が、この1年半飲みにも行かず、朝は5時に起床して資格取得に向けた勉強をし、22時には下の子供と一緒に布団に入るという生活でしたので、もう外へ飲みに出ること自体が億劫でたまらなくなっています。

一般の方ならその傾向はより一層強いのではないのでしょうか。

そしてコロナ禍で経済基盤が不安定になったことで、家庭では更なるデフレ志向が強くなりました。

しかし、世の中は前述したとおり物価高騰・原油価格高騰の真ただ中。

生活していくうえで必須である『家の食事』をいかにコントロールしていくかを模索している中では、『外の食事』に対して積極的になる要素は皆無です。

さらに生活者の外食離れは進みそうです。（了）

『相模の国から ～大魔神のたび～ 』奄美大島への旅②2021.11/3～6
茨城県 境町 参与 溝口 久

この夜、案内してくれるのは奄美の自然を40年以上撮影し続けている自然写真家の常田守さんだ。アマミノクロウサギ、アマミトゲネズミ、イシカワガエルなど奄美唯一の動物に出会えるようにガイドすると言う。車に乗ってのツアーだ。車のライトで動物を発見、持っている携行ライトで照らしてくれる。お目当てのクロウサギに会えるか否かが問題だ。かつてハブ退治に導入したマングースがハブではなくヤンバルクイナやクロウサギを食していた。ハブは夜行性、マングースは昼行性で出会う機会も少ないし、危険を冒してまでハブを食そうとはしない。ハブVSマングースはあくまでショー、これを海外で見た動物学の権威ともあろう東大の広瀬教授が1910年に勧めたという。この「侵略的外来生物」の退治に巨費と人区そして年月を要することになった。この効果もあってクロウサギは明らかに増えている。ただ、次なるはノネコ、そして車にひかれて死ぬ「ロードキル」が問題になっている。クロウサギには糞や食事をするために路上に出てくる習性がある、これというのもハブからの攻撃に備えるもの、鳥にだって枝先に留まるのも同じ理由による。島ではハブが生態系ピラミッドの頂点にいるのだから。

大正時代にすでに国の天然記念物になったアマミノクロウサギについて調べてみると「ヨーロッパのアナウサギの祖先。一説には500万年～300万年前からいたと言われている。大陸で栄えたアマミノクロウサギの祖先種の生き残りといわれたことも。大陸の端っこに来ていたやつが、天敵のいない島でのんびり暮らしていたというわけ。大陸では後に生存能力の高いノウサギが登場し、古い形質をもつウサギはすべて絶滅した。ノウサギは草原で進化したから速く走り、走ると体温が上がるから、熱を逃すために耳が大きくなった。一方、アマミノクロウサギは体も耳も小さく、足が短いから走るのは苦手。けれど穴掘りの名人。昼間は斜面上に掘った巣穴で過ごし、夜になると穴を出て活動を始める。赤ちゃんの育て方がユニークで、自分の巣穴とは別の穴を掘り、ハブが入らないよう土で入り口に蓋をする。授乳ごとにふたを掘り開け、中から赤ちゃんが出てきて、おっぱいを飲み終えたら穴へ戻る。すると母親はまた蓋をしてどこかに行っちゃう。その頻度は48時間に一度。赤ちゃんがミルクを消化する時間と、母親の



おっぱいが張る時間が、ピタリと合っている。この貴重なウサちゃんに会うことが本ツアーの最大の目的、たださえ保護色で見つけにくいのではあるが、前述のとおり道路あるいはその近くにいることが多いため、ガイドの常田さんが目ざとく見つけ教えてくれる。おかげさまで3時間ツアーで7回も遭遇することができた。他にも2台のツアーの車に出くわした。今後拡大するであろう観光による環境問題に備え、有料の認定ガイドを付けて、その上で入所制限をされている。満点の星空の下に見える小川にはリュウキュウアユの魚体が月の光に光る。これとて絶滅が危惧されている。世界自然遺産登録を機に確実な保全がされることを望んでやまない。ちなみにナイトツアーは4人で3万円也だった。環境保全と観光振興の両立あってこそ世界自然遺産登録の意味が出てくる、ここのコントロールを注目していきたい。

翌日は、奄美市役所OBで鹿児島県建築士会奄美・大島支部長の伊集院さんが奄美市街地と大浜海浜公園を案内してくれた。

大島は山が海まで迫っており平地が少ない。45年前見た奄美市、当時名瀬市は海岸からサンゴ礁を見るためのグラスボートが出ていた。今は埋め立てが進み海岸線がだいぶ先に出て、生まれた平地は開発途上にあった。島内の移動も切土・盛土して道路をつくるのではなく、トンネルが多く、しかも長い。このことが山の自然環境の保護になっていることは言うまでもない。開発にかかるコストが、面積・人口を前提に考えると相当に大きいことが想像される。これは略して言う“奄振”があるからである。

昭和28年に奄美群島が本土復帰の際に、島の発展のために公共事業に係る補助率かさ上げや予算枠確保のために「奄美群島復興特別措置法」ができ、昭和39年に「奄美群島振興特別措置法」、そして今「奄美群島振興開発特別措置法」に変化。鹿児島県の大島支庁も430人の陣容があるから、公共事業は相当なものがあると感じる。

伊集院さんが関わった市営住宅を見せてくれた。青い海のそばに立ち並び壁面には動物の絵が描かれている。面白い「私はライオン棟、私は象棟」に住んでいるというわかりやすい会話が交わされているんじゃないだろうか？広場には屋根付き土俵がある、校庭にもそれはある。静岡県小山町の金時公園を再整備する時に、金太郎ゆかりの公園だからということで屋根付き土俵を設けた。春の金太郎まつりの時だけ土俵をつくり子供相撲を毎年行っている。このときだけの仮設でいいじゃんという声はあったが、モニュメントの役割もあるので無視した。

静岡県内では珍しい。（了）

